A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

永井荷風

(一)

日本の文学

18

永井荷風(一)

日本の文学　18　　©1967

永井荷風（一）

昭和42年11月25日初版印刷
昭和42年12月5日初版発行　　価390円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　矢嶋製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

あめりか物語より 7
牧場の道 7
林間 12
寝覚め 17
夜半の酒場 26
落葉 31
夜の女 35
夜あるき 46
ふらんす物語より 50
ローン河のほとり 50
ひとり旅 53
巴里のわかれ 58

歓楽 68
曇天 94
狐 99
すみだ川 109
妾宅 141
私家版 腕くらべ 157
おかめ笹 269
葡萄棚 366
雨瀟瀟 368
雪解 388
日和下駄 404

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

小説作法　158
断腸亭日乗 巻之十　166
注解　517
解説　大岡昇平　534
年譜　548
口絵　「すみだ川」　右田年英
挿画　「猷楽」　石川寅治
「すみだ川」　小林清親
「腕くらべ」　川瀬巴水
「腕くらべ」「おかめ笹」　木村荘八
「日和下駄」　鳥居清信
葛飾北斎
歌川国安
昇亭北寿
渓斎英泉
一立斎広重
小林清親

永井荷風

(一)

あめりか物語 より

牧場の道

*タコマに滞在していた時分、その年も十月の確か最終の土曜日であった。

秋は早や暮れ行くので、往来の両側に植えられた楓の並木を初め公園や人家の庭に、一夏の涼しい蔭を作った樹木という樹木は、昨夜の深い霧で大概は落葉してしまった。このタコマのみならず米国の太平洋沿岸はもう一週間を過ぎずして、いわゆる悲しい十一月の時節となったならば、毎日霧と雨とに閉されて来年の五月になるまで、ほとんど晴れた空を見ることはできない。今日の晴天はおそらく今年の青空の見納めであろうという。私はこの地の風土や事情に通じているある友に勧められて、ともどもこの一日を晩秋の曠野に自転車を馳らせることにした。

タコマ大通りという山の手の一本道を東へと走る。この一本道から眺望するとタコマの市街はピューゼットサウンドと呼ぶ出入りの激しい内海に臨んでいちじるしい傾斜をなしているところから、無数の屋根と煙筒、広い埋立地、波止場、幾艘の碇泊船、北太平洋会社の鉄道——全市街はただの一目に瞰されてしまう。そして入江を隔てた連山の上には日本人がタコマ富士と呼ぶレニヤー山が雪を戴き巍然として聳え、夜明けの晩い北方の朝日がちょうどその半面を真紅の色に染めている。私ら二人は街端れの大きな渓の上に架けてある橋を二ッばかり渡り、特別に造られた広い自転車道を四哩ばかり馳って、南タコマと呼ぶ村落を通り過ぎると、すぐに広漠たる野原に出た。道の通ずるままにあるいは上りあるいは下ることあたかも波に揺られる舟のごとく、ついに行き尽して槲の林にはいった。道はやや険しくなり、この地方、ことにワシントン州の各所に黒い深い森林を造っている真直ぐな黒松は槲の林に引き続いてここにもたちまち私らの行く手を遮った。私らはようやくに苔むす一条の小道を見出し、その導くがままに、林間の湖水アメリカンレーキの畔に休み、さらに転じてスチルカムと呼ぶ海岸の孤村を訪うたのである。

「帰り道にこの山の上の癲狂院を案内しよう。ワシントン州の州立癲狂院だから、この辺ではちょっと有名だ

よ。」

この時友はこう言ったので、私は彼の後に続いて後の丘陵へ上ると、遠くのかなたには気も晴れ晴れする牧場を望み、近くは幽邃な林を前にして、宏壮な煉瓦造りの建物が、すぐさまそれと知られるのであった。

白いペンキ塗りの低い垣で境された広い構内は、人の歩む道だけを残して、一面に青々とした芝生がその上に植えられた枝の細かい樹木やいろいろな草花と相対して目も覚めるばかり鮮明な色彩を示している。裏手の方には宏大な硝子張りの温室の屋根が見え、小径のところどころには腰掛、広場の木蔭には腰掛け付きの鞦韆なぞも出来ていたが、見渡す限り森閑として人の気色もない。

私らは鉄の門前を過ぎる一条の砂道をぱゆるゆると自転車を進ませ、もと来た牧場の方へと下りて行った。友はいろいろ説明したついでに、

「この癲狂院には日本人も二三人収容されているよ。」

何事もないように言ったが、私にはこれが非常な事件であるように思われた……同時に友は、

「皆な出稼ぎの労働者さ。」と付け加えた。

出稼ぎの労働者という一語はまたしても私の心を動かさずにはいない。思い返すまでもなく、過ぐる年故郷を去ってこの国に向う航海中、散歩の上甲板から、彼ら労働者の一群を見て、私はいかなる感想に打たれたろう。

彼らは人間としてよりはむしろ荷物のごとくに取り扱われ狭い汚い船底に満載せられていた。天気のよい折を見計らって彼らはむくむく甲板へ上って来て茫々たる空と水とを眺める、といって心弱いわれらのごとく別に感慨に打たるる様子もない。三人四人、五人六人と一緒になって、何やら高声に話し合っているうち、日本から持って来た煙管で煙草をのみ、吸殻を甲板へ捨て、通り過ぎる船員に叱責せられるかと思うと、やがて月の夜なぞには、各自の生国を知らせる地方の流行唄を歌い出す。私は彼らのうちに声自慢らしい白髪の老人の交っていたことを忘れない。

彼らは外国で三年の辛苦をすれば国へ帰ってから一生楽に暮せるものとのみ思い込んで、先祖が産れてそして土になった畠を去り、伊太利の空よりもさらに美しい東の空に別れ、移民法だの健康診断だのと、いろいろな名目の下に行われる幾多の屈辱を甘受して、この新大陸へ渡って来るのである。しかしこの世は世界のいずこへ行こうともみな同じ苦役の場所である。彼らのうちの幾人がその望みを達し得るのであろうと、いろいろ悲しい空想の湧き起るにつれて、私の目には今まで平和と静安の限りを示していた行く手の牧場は、たちまち変じて言わん方なき寂寥を感ぜしめ、松の森林は暗澹として奥深く、恐怖と秘密の隠家であるように思われた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

友はとある木蔭に車をよせて休息するのを幸い、私は近寄って、
「君は知っているかね。どうして狂気なぞになったのだろう。」
「あの……労働者のことかね。」と友はしばらくした後初めてその意を得たもののごとく、「大概はまず失望という奴が原因になるんだが、一人はそればかりじゃない……実に可哀そうな話さ。しかしそういったような話はアメリカには珍らしくないよ。」
「どういう話だ。」
「僕も人から聞いた話なんだが……いくら日本人の社会が無法律だったからッて、これなんぞは随分激しいと言っていいね。もう六七年前のことだっていう話だが……」と友は衣嚢から煙草の袋を取り出し指先で巧みに巻煙草を作りながら話した。
　そのころにはちょうどシアトルやタコマへ日本人がしきりと移住し始めた当時のことで、今日のように万事が整頓していないから、いろいろの罪悪がほとんど公然に行われていた。カリフォルニヤの方から彷徨って来た無頼漢や、どこの海から流れて来たのか出所の知れない水夫あがりの親方なぞ、少しく古参の滞米者は、争って案内知らぬ新渡米者の生血を吸ったものだ。こういう危険な悪所へと彼――発狂者の一人はその妻と二人連れで日本から出稼ぎに来たのである。
　一体日本の農夫が渡米の野心を起す最大の原因は新帰朝者の誇大な話を聞くことであるが、彼もまさしくそのうちの一人であった。彼は蕎麦の花咲く紀州の野に住んでいたがちょうどその村へ十五年目で布哇島から帰って来た男があって、アメリカといえば金のなる木がどこにも生えているような話をするところから、ふいとまだ見ぬ極楽へ行く気になり、ことに女の労働賃銭は男よりもよいというようなことからとうとう夫婦連れの渡米が実行されることになったのである。シアトルというその地名さえ発音するには舌が廻らぬほどな不知案内の土地へ上陸する。と波止場の上には船の着くのを待っている労働口の周旋屋、宿屋の宿引き、醜業婦密輸入者なぞいう、いずれも人並みよりは鋭い眼を持っている輩が、それぞれ腕一杯の力を振って各自の網の中へ獲物をつかみ入れる。彼ら夫婦は宿屋の案内と称する一人の男に連れられて、大きな荷馬車と人相の悪い亜米利加の労働者があっちこっちにごろごろしている汚い町から、とある路地に入り、暗い戸口を押し明けて、狭い階子段を上るのではなく、地の下へと下り、薄暗い一室に誘われた。
　ここで過分な周旋料を払わせられた後妻は市中の洗濯屋に働き男は市からは十哩ばかり離れた山林の木伐に雇われることとなり、昼もなお薄暗い林の中の一軒家に送

り込まれた。ここには三人の日本人が同じく木伐となって寝起きしていたが、そのうちの親方らしい一人が、
「知らねえ国へ来たらお互いが頼りだ。これからは皆な兄弟のようにして働こうよ。」と言うので、彼もことのほか安心して、毎日仲間とともに西洋人の親方に監督されながら、一心に働いていた。
　仕事から帰って来ると、寂しいこの小屋の中で、新参の彼は三人の仲間から問われるままにいろいろと身の上話をする……と親方らしい一番強そうな男が眼をぎらぎらさして、
「嘆アをシアトルへ置いて来たッて……まア何ていう不用心なことをしたもんだ。」といかにも驚いたように、大声で他の仲間を見廻した。
「だってお前さん、この国へ来たからにゃ稼ぐのが目的だから、嘆と別れているくらいなことは覚悟の上だア。」と新参の彼はしかし悲しそうな調子で言うと、かの男は続いて、
「おれの言うのはそうじゃねえ。それアお前さんの言う通り稼ぎに来たからにゃそれくらいの覚悟はなくちゃならねえが、女一人をシアトルへ置くなア、川辺へ小児を遊ばしとくよりも険呑だというのさ。」
「へーえ。どうして。」
「お前さん、まだ来たてだから知らねえのも無理はねえ。シアトルてえところは……シアトルばかりにゃ限らねえ、このアメリカへ来た日にア、どこへ行ったって女一人を安穏にさしとくところはありゃアしねえ。まア瑕をつけるぐらいならまだしもだ。お前さん、悪くするともう二度と嘆の顔は見られねえぜ。」
「全くさね。用心するがいいよ。」と他の一人が付け加えた。以前の男はしばらく無言で、泣き出しそうな顔をしている新参者の様子をば上目でじろじろ見遣っていたが、大きなパイプで煙草を一吹きしながら、
「この国へ来たら、どんな尼ッちょでも、女という女は皆な生きた千両箱だ……千両じゃねえ千弗箱だ。だから嬪夫てえ女街商売をしている奴が、鵜の目鷹の目で女を捜しているんだが、時にゃ随分無慈悲な仕事をするよ。これア真実の話だぜ。夫婦連れで往来を歩いているところを、いきなり後から行って亭主を撲り倒して女房を掻っ攫って、それなり雲隠れをしちまった。この広いアメリカだものもう分るものか。一晩のうちにどこか遠いところへ行って女郎に売れア、千弗は濡れ手で粟だ。お前さん、悪いことは言わねえ。早くどうかしないととんでもねえことになるぜ。」
　新参の彼は眼に涙を浮べていた。というものの今の身分ではどうすることもできない。以前の男は他の仲間二人としばらく顔を見合わして何やら互いに合点したよう

に目と目でうなずき合いながら、
「こうしたらどうだね。いっそのこと。ここへ嚊を呼び寄せたら……。」
「何ぼ何だって、そんなことが……。」
「出来ねえと言うのかね。それア表向きはどうか知らねえが、この山の中の一軒家で、日本人はおいらたち三人きりだ。心配することはねえ。ここへつれて来りゃア、お前も毎日女房の顔が見られるし、おいらたちだって煮焚きや洗濯もしてもらえるし、食うものだって、おいらたち四人で分けてやりゃア、女の一人ぐらい大したことはありゃしねえ。」
　こう言われたが、しかし彼はこの意見に対して同意する力もなければ、また不同意を称える資格もないのである。万事はすぐさまかの男の言うがままになった。すなわち次の日に、彼はかの男とともに市中に出て妻を連れて林の中の小屋に帰って来たのである。
　しばらくは事もなく、彼は幸福に妻とともにその日を送っていたが、ちょうど今日は日曜日というのに朝から雨が降り出し、一同は外へ遊びにも出られず、一日小屋の中で酒盛りを始めて、飲むやら唄うやら、いつしか夜も晩くなった。もう寝床へ行こうという時になると、かの男は座を立ちかけた新参者をば、
「おい、ちょいと相談があるんだ。」と呼び止めて他の仲間と目を見合わせた。
　小屋を蔽う深林は雨と風とで物凄い呻り声を立てている。
「何です。」
「ちょいとお願いがあるんだ。」
「何です。」
「ほかでもない。今夜一晩嚊を貸してもらいてえんだが……。」
「ははははは、大変酔ッてるね。」
「おい。酔って言うんじゃねえ。冗談でもない、洒落でもない。相談するんだが、どうだい。」
「ははははは。」と新参者は余儀なさそうに笑った。
「相談するのに笑うてえ奴があるかい。」と今度は他の一人が「どうだい、兄弟の誼だ。今夜一晩おいらたち三人に貸してくれめえか。」
「……。」
「物は相談だ。どうだい。不承知なんかね。不承知ならまアいいや。しかしよく考えてみな。この山ン中で、四人こうして働いていてよ。お前一人いい目をしているからって、それでお前は気が済むのか。よくあるこッた、風の吹く晩に山火事が起ったら、おいらたち四人は死なば一緒だ――一人ぼッち仲間を置き去りにして逃けるわけにも行くめえ。本部からまかり間違って食料が届か

ないことでもありゃアお互いに食うものも半分ずつ分けなきゃアなるめえ。人間は皆な兄弟分。自分ばかりがよきゃアそれでいいというもんじゃねえんだぜ。おいらたちはな、このアメリカへ来てからもう五年になるんだが、たまに一遍だって柔らかい手に触って見たこともねえんだ。お前の宝物は誰のものでもねえ、チャンとお前様の物だということは分っていらア。だからな、おいらたちはそれを無理無体に掠奪ッておいらたちのものにしてしまおうというんじゃねえんだ。いいか、ただ貸してもらおうとお願い申すんだ。」

「早い話しがよ。お前はおいらたちの持っていねえものを持っているから、それを分けてくれというのよ。」

「どうだい。話が分ったら、早く返事を聞こうじゃねえか。」

男は死んだ人のごとく真青になり総身をぶるぶる顫わすばかり。女はその足もとに泣き倒れて早や救いを呼ぶ力さえない。

風雨はなお盛んに人なき深山のうちに吠え狂う。やがて小屋の中には一声女の悲鳴……それを聞くとともに男は失心してその場に倒れてしまった。

彼は蘇生したが、それなり気が狂ってふたたび元の人間には立ち返らなかった、彼は癲狂院に収容さるる身となったのである。

＊　＊　＊　＊

私はほとんど茫然としてしまった。友は早や草の上に横たえた自転車を引き起し、片足をペダルに掛けながら、「しかし仕方がないさね、そういう運命に遇ったのが不幸というより仕様がないさね。われわれは自分より強いものに出遇ったら、何をされても仕方がないよ。」と言って二三間車を馳らせながら、後なる私の方を振り向き、「そうだろう、君。強いものには抵抗することは出来ない。だからわれわれは Mighty God……すなわちわれわれよりは強い全能の神に抵抗することは出来ない。いやでも服従していなければならないのだ。」

一人彼は愉快そうに笑って、夕陽の光眩き牧場をば、一散に車の速度を早めたので、私は無言のまま彼に遅れまじと、しきりにペダルを踏みしめた。

どこからともなく野飼いの牛の頸につけた鈴の音が聞える。南の方ポートランド行きの列車が野の端れを走っている。

明治三十七年一月

林間

シカゴ、ニューヨークのような騒がしい米国北部の都

会を見物した旅人が一たび南の方首府なるワシントンを訪うと、全市は一面の公園かとばかり街々を蔽う深い楓の木立の美しさと、どこへ行っても黒人の多いのに一驚するであろう。

自分も新大陸を彷徨い歩いたある年の秋、この首府に到着して早くも二週日あまり。まず大統領の官邸ホワイト、ハウス、議事堂、諸官省から、市内の見るべきところは大方見尽し、ついにはるかなるポトマックの河上マウント、ヴァーノンの山中に華盛頓の墓をも弔いおわって、このごろは酣なる異郷の秋を郊外のそこここに探っている。そのうちでもことに忘れられないのはマリーランド州の牧場の夕暮れであった。

日沈んで半時間あまり燃ゆる夕栄えの色は次第に薄らいで、大空に漂う白い浮雲の縁にのみかすかな薔薇色の影を残すと、草生い茂る広い野の面は青い狭霧の海となり、遠い地平線のかなたはいずれが空いずれが地とも見分けられぬようになる。それに反して、遠いかなたこなたの真白な農家の壁や、四五人連れで野を越して行く牛追いらしい女の白い裾、またはところどころに黄葉している木の梢、名も知れぬ草の花なぞそういう白いものの色のみは光線の作用で、四辺の薄暗く黄昏れて行くに従いかえって浮き出すごとく鮮明になって、しばらく見詰めていると不思議にも次第次第に自分の方に向って動き近づいて来るようにも思われる。

それは単に見る眼のみならず、心の底までに一種言いがたい快感を誘い出す。自分はついに冠っている帽子を振り動かし四辺が全く夜になるまでも、一心にそれらの浮き動く色彩を差し招いた。

次の日もこの夕暮れの美しい夢に酔おうとて、同じく日の落ちるころを計り、このたびはポトマックの水を隔てた――そこはもうヴァージニヤ州に属している――向う岸の森をと志し町端れの崖下に架っている一条の鉄橋を渡った。

渡ると橋袂にはすぐさま蔽い冠さるような木の繁みを後にして木造の小さな電車の待合所がある。これはほど遠からぬ*アリントンという広大な共同墓地や練兵場や、兵営、将校の官宅などのあるところに赴く電車の出発点なので、今しも車を待ち合わしている人たちは大抵褐色の制服をつけた合衆国の兵卒で、中には大方士官の家にでも使われているらしい黒人の下婢と、ワシントン市中へ買い物に出た帰りらしい白人の年増の女も交っていた。

自分は兵卒や水兵の姿を見る時ほど、一種の重い感情に胸を圧されることはない。立派な体格若い身空のあらゆる欲情をば、絶え間なく軍紀軍律というもので圧迫されている肉の苦悶が、どことはなしにその日にやけた顔や血走った目の色に現われているさまの外見には恐ろし

くまた哀れに見られるからである。彼らは三人四人と電車の来る間を橋の欄干に身を倚せて、まだ醒めぬ酒の酔いを醒ましているものもあれば、噛み煙草の唾を吐きすてながら、靴音高く橋の上を散歩しているものもあり、または残り惜しげに水を隔てたワシントンの方を眺めているものもあった。大方午後に訪ねた女のことでも思い返しているのであろう。

自分は兵卒と同じく橋の欄干に身をよせかけて四辺を眺めた。ちょうど、入り際の夕日は大空一面を焦げるように焼き立て、真向にその鋭い光をワシントンの方へと射返しているので、ポトマックの河水に臨んだ公園の色づいた梢一帯はあたかも濃艶な土耳古織の帳帷のよう。その上に五百五十五呎高く直立しているというかの驚くべき大理石のワシントン紀念碑の側面はさながら火の柱を見るに等しい。やや遠く離れた議事堂の円頂閣もかなたこなたに聳ゆる諸官省の白い建物も皆一様の紅に染め出され、市中の高いホテルの窓々は一ツ残らず色電気のようにきらきら輝いている。

晴れ晴れした大きなパノラマである。身は飄然として秋風のうちに立ち、これが西半球の大陸を統轄する第一の首都であるのかと意識しつつ、夕陽の光に水を隔ててはるかに眺めやれば、何とはなく人類、人道、国家、政権、野心、名望、歴史、というようなさまざまな抽象的の感想が、夏の日の雲のように重なり重なって胸中を往来し始める。というものの自分は何一つ纏まって、人に話すような考えはなかった。ただ漠として大きなものの影を追うような風で、同時に一種の強い尊厳に首の根を押えつけられるように感ずるばかりである。

自分はしばらくして後俯向いた顔を起し、ふたたび四辺を見廻した時には、先ほど橋の上を歩いていた兵卒も女づれも、すでに待ち合わした電車に乗って行った後と見えて、次の電車を待つ新手の人が早や二三人も集まっていた。

自分は電車道に沿うて一二町ほども歩み、道の両側から蔽いかかる林の中へと当てもなく分け入った。

林はおもに解と楓とである。この国の楓は至って夜露に脆くまだ黄葉もせぬ先から散り初めるが常とて、羊腸たる小道はいずことも見分かぬまで大きな落葉に蔽われていたが、しかし解の林は今がちょうど紅葉の盛り時。その深い繁りの中に射し込む夕陽の光は木の葉の一枚一枚を照らして、まるで金色の雨を降り注ぐようである。けれども暮れて行く秋の日足は、移り行くことの早いところから、見ているうちにかなたの明るい梢が陰になったかと思えば、こなたの陰なる梢はたちまちにパッと明るくなる。すると明るい方では一度すでに暗についたら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb